

田舎の町医者の子に育つて その1

— 昭和20年代～34(36)年 —

| 東区・荒田支部 |

栗 博志・栗 隆志

| 大海クリニック・大海宮崎クリニック |

大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼

はじめに

- ・ふるさとの山に向ひて 言ふ事なし
ふるさとの山はありがたきかな
- ・やはらかに柳あをめる
北上の岸部目にみゆ 泣けとごとくに
- ・ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に そを聴きにゆく
- ・たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて 三步あゆまず
- ・いのちなき砂のかなしさよ さらさらと
握れば指のあひだより落つ

小中学生の頃、多くの石川啄木の歌を覚えた。啄木の歌には、心を震わせるものがある。望郷の念、脳裏に密む心象風景としての故郷と母を呼び醒す。

結核で散った26年の人生。写真の顔をよく見れば、いかにも若い。

私は既に、彼の3倍も長い人生を生きてきた。幼少の頃、若かりし頃の記憶が甦るのも宜なるかなの思いも募る。

啄木に限らず、子規、一葉など、多くの人達が結核で亡くなった。樋口一葉が結核で死去したのは、わずか24歳の時である……。

〔1〕抗結核薬パスと母と薬ビン

12月の現在の我家の玄関の棚の上の押し絵の間に、緑色と青紫色のシンプルな2本のビンが立っている(図1左)。

実際は3本ある(図1右)。

これらは、65年以上前の我家にあったビンの生き残りである。素朴である。美しい。

私が好きな点は、まず第1に古い事、それに金属製のキャップのネジ込み式のデコボコが、ビンの口の所に無い事である。

このビンの栓はコルクなのである。



図1 左:65年以上前の粉薬を入れていた薬ビン 右:美しく、素朴、栓はコルク

私は今から76年前に、大分県日出町に生まれた。広島原爆で焼け出され、両親と兄の3人が、母の実家のある大分県の、この地に転居し、父がここで開業したのだ。

日出町は当時、人口5～6千人位の小さい町であったが、盆踊り、町内運動会、各神社のお祭り、山車^{だし}……など、現在の地方都市よりも、ずっと賑っており、活気があった。

父は町に4軒あった町医者^{ぢや}の一人だった。

当時と距離感の異なりはあるが、町中の事は、今でも鮮明に思い出す事ができる。

小6の時に、日出町から温泉のある別府市に転居したので、頭の中の年代の推定も、かなり正確である。

その引っ越しの時の事である。

我家の床下の数個の大きい竹カゴに、ぎっしり詰め込まれていた色ガラスのビンが、(割られて?)運び出されて行くのに気付いた私は、あわててこの3本を救出したのである。当時、日出町には、ガラス製品を造るガラス工場があり、空ビンは引き取ってもらったのだろう(図1右)。

私が、7～8歳位は、シート・タイプの錠剤は、ほとんど無く、ガラス・ビン入りの粉末薬が、ほぼ全てであった。

正月の初荷として、初荷ののほりを立てたトラックの荷台に、薬屋の職員数名がハッピーを着て乗り込み、各医院の玄関で、手拍子に合わせ大声で、「あけましておめでとうございます」と叫びながら、錠剤入りの大きい紙箱を、配って回っていたのは、多分8～9歳頃からではなかろうか?もちろんビン入り粉末薬は、その後も生き続けた。

そんな中、私の記憶にしっかり刻み込まれた薬が1つある。私が4～5歳の頃である。

抗結核薬「パス」である。

パスは、丸くて大きい金属製のカンに入っていた。私は、結核が恐ろしい病気である事

は既に知っていた。

パスは、小さい円柱形の顆粒剤(シャープペンシルの芯ぐらいの太さで、3mmの長さ)であった。よくこんな細かいものが、大量に作れるものだと感心したものである。

母は上皿天秤の上に、白い薬包紙を乗せ、左側に分銅、右側に山盛りのパスを乗せて計量する。

バランスの取れた所で、薬サジで薬を掬って、薬棚の前の広い台の上に、あらかじめ数列に並べた薬包紙の上に、トン・トンとリズムカルに音を立てながら、器用に適量に分配するのである。

私は、盛られた薬量の均一性に驚いたものである。

私は母の左側、高い所に在る薬ビンを取る為の足台の上に立ち、母と一緒に、薬包紙の薬を三角形に包んでいった。

母に比べれば、ごくわずかな数だろうが、母を手伝っていると思うと、楽しい時間であった。

左の親指を使う事が、立体的に包むコツで、一定数を並べて一組にし、大きい四角形のカンに詰めて、ストックしておくのだ。

一方、結核の患者さんは、毎日、こんなに大量の薬を飲むのかと感心していたが、この薬の山が、患者さんを救うのだと思うと、小さい顆粒の一粒もこぼさずに丁寧に包まなければ、と思うものであった。

ただ、このお手伝いも、2～3回で終わったと思う。遊ばなければならなかったからである。

薬の大切さを身にしみて感じた時でもあった。ただ大量生産、大量消費の現代の患者の飲む薬の、種類×数=量たるや、当時の比ではない。当時であれば不可能であったろう。

まず粉末を計量し、分薬・分包する手間と時間、それに健康保険制度が無ければ、薬代金の支払いもできなかったろう。

(1回分が少量の薬の場合、ピンク色の乳

糖を加え、乳鉢で均一に混合しなければならず、一層手間がかかることになる。

現代の投薬量をみると、本当に全てが必要かとの思いも浮かぶが、シート式錠剤（粉末剤も含めて）の発明は、画期的である。

今回、「パス」を調べてみると、「第一製薬」が戦後まもなく、努力に努力を重ねて製造にこぎつけ、結核患者に光明を与えたようである。日本製である事が重要!!

（私は、この会社から金品は受け取っていません。現代風に言うと、利益相反なし）。

ただ現在の第一製薬の誰一人として、この歴史的快挙を認識している者はいないだろう。



図2 大ビンから小分けされた小ビン
黒と赤のラベルと父の字の薬名



図3 製薬会社の大ビンと小分けされた小ビン

第一製薬に限らず、全ての製薬会社、日本の全ての企業、全ての日本人が、額に汗し、敗戦国日本の復興に努めていた時代であった。戦争による死への恐怖が無くなった戦後、病気・飢餓に打ち勝ち、生き延び、より安定した生活を営める社会の実現への希求と不断の努力が、日本の復興を成し遂げたのである。

薬棚の上の方には、製薬会社の大ビン、手の届く所には、それを小分けした小ビンが並べられ、小ビンには、父の整った字で、薬名が書かれた、黒か赤のラベルが貼られていた。赤ラベルは、取扱い注意、という事は、当時の私でも感じられた（図2, 3）。

台の下のスライド式の扉の付いた、大きい棚には、大きい紙箱に入った薬や、パスの大きいカンなどが入っていた。

私の手元には、別に3つの製薬会社の大ビンがある。数十年前に鹿児島に持ってきた大切な物である（図4）。ほこりも積もり、ラベルも劣化した。

ラベルの上部には、各社のロゴ、そして「日本薬局方」そして薬品名が書かれている。

いずれも株式会社（文字は旧字体）。

左：武田長兵衛商店（ウロコ印）

中：田辺五兵衛商店（2羽の鶴）

右：塩野木商店（分銅印）



図4 製薬会社の大ビン3本
左：武田長兵衛商店（ウロコ印）
中：田辺五兵衛商店（2羽の鶴）
右：塩野木商店（分銅印）

今、思い出したが、『うろこのマークのパンビタン、パンパンパンビのパンビタン……タケダ、タケダー』というコマーシャル・ソングがあった。小学生の頃、熱中していたテレビ番組「月光仮面」「ジャガーの眼」のコマーシャル・ソングである。懐しい。

なお、武田製薬の「ウロコ印」の由来の説明文は、間違っていると思うが、ここでそれ

に関して述べる余裕が無いので割愛する。
みずぐすり
水薬について1つだけ思い出がある。

私の好きだったのは、「ネオカフローゼ」のラベルの風邪薬だった。その後知った「赤玉ポートワイン」を更に甘くしたような、おいしい味だった。

医師になり、初めて、この名前の意味を知り合点した。「新しい、咳止め用の、甘口のロゼ・ワインのような水薬」という意味が込められているのだろう。



図5 「栗醫院」の大中小3種の水薬ビン
中・大のビンには「栗醫院」の文字

図5は、「栗醫院」の水薬のビンである。大中小の3種がある。中・大のビンには「栗醫院（まちがって栗）」の文字を認める。

〔2〕国民皆保険、集金と全国一斉休診

県医師会報と市医報は、届いたら必ず目を通すようにしている。

県医師会報（令和6年11月号）が届いたので、まずいつも通り、表紙の題字と写真を見る。

いつも見るのであるが、題字の田上容正先生の端正な字姿、微妙な配字の見事さに感激する。鹿児島島の医師の中に、かように素養・教養のある方がいらっしゃる事に嬉しくなる。

先日、私の持てる古典、漢詩文の能力の全てを注ぎ込んで（然し簡単にできた）「大西郷を讃えて、その2」の長文の詩を書き終えた。

将来、鹿児島生まれの人でも、このような詩を書く人は、誰もいないだろうと思われる

が、先生に書き遺して頂きたいほどである（もっとくだけた書体で）。

また永田政幸先生の丸尾の滝の写真で、柱状節理が身近にあることにも驚かされた。

本号で私が、最も興味深く読ませて頂いたのは、木之下藤郎先生の、時言時論「パラダイムシフト」の最後の所である。

国民皆保険ができる（1961年）以前の、先生のお母さんの集金の苦勞話と、医師会の団結の話である。

実は、今回私が書き進めているこの文章を、書くきっかけになったのが、先生の文章である。

私が小5まで住んでいた大分県日出町の歴史を少し語りたい。

大阪の陣で滅亡した豊臣家の血縁が生き残ってはいないと、小さい頃は思っていたが、小学校高学年になると、そうでもない事を薄々感じていた。

1561年、木下藤吉郎と結婚し、藤吉郎が天下人・豊臣秀吉に成り上がった時、その正室・北政所は、高台院寧々と呼ばれた。

秀吉に似合わず、寧々は優しく、氣遣いのできる女性で皆から慕われていた。

寧々は元和元（1615）年、大阪の陣で豊臣家が滅亡した後にも、徳川家康に1万6千石余の所領を安堵された。

大名クラスの石高で、一人の女性とその使用人を養うには、有り余る所領であった。

寧々は、寛永元（1624）年死去、丁度4百年前の事である。享年76歳であった。

寧々の兄の三男、木下延俊は、慶長5（1600）年、天下分目の関ヶ原の戦いで東軍に加担し、功をあげ、家康から日出藩3万石の初代藩主に任ぜられたが、これが日出藩の始まりである。

薩摩と言えは鶴丸城、日出と言えは陽谷城である。鶴丸城の背景には城山、陽谷城の背景には、別府湾が広がり、日本猿で有名な高崎山を遠望する。

図6は、遠望する別府湾と高崎山。
図7は、1年半前に訪れた暘谷城の入口。



図6 暘谷城の背景 別府湾と高崎山を遠望



図7 暘谷城の入口(1年半前)
城内は私の通った日出小学校

子供の頃は、土道だったが今は石タイル。入口の両側は桜並木だった。私の背後に当時の桜の老木が一本見える。

入学式の時の満開の桜が目に見え。



図8 城前面の堀(左半分)
当時は蓮が咲いていた。復元された隅櫓も見える

図8中央は、城入口の石垣。石垣は、この城の四方を取り囲んでいる。復元された隅櫓

も見える。城内が小学校。昔は堀に蓮の花が咲き、殿様蛙が騒がしく鳴いていた。

多分、私が4歳頃（昭和で言えば28年）、たった一度であるが、母と集金の経験をした。

母と2人で、まだ舗装されていない国道から脇に逸れ、田んぼの細い畦道を通り、テレビ番組「ポツンと一軒家」に出るような、広い前庭のある農家に辿り着いた。秋晴れであった。

農家の周囲に広がる田んぼには、収穫された稲が刈干されていた。

当時は、稲刈り後の農閑期に、集金していたように記憶している。

母は葉書より少し小さい、約50枚組の領収書を持参していた。既に患者名、金額が記入され、ハンコが押されており、入金があれば、それを渡すのである。

日当りのよい縁側でお茶を飲み、世間話をして帰宅した。

当時の私の行動範囲は限られており、未知の農家は、ずいぶん遠方に感じられ、お父さんは、こんなに遠くまで往診にきているんだと感心した（外来患者だったかもしれない）。

現在、車で走れば医院から20秒たらずであろう。田んぼは全て住宅地になっていた。

母は帰宅して、「お父さん、今年もだめだった」と言った。母の言葉は鮮明に記憶しているが、父が何と答えたかは全く覚えていない。「そうだろうね」「御苦労さん」などと言ったのだろう。

ただ我家には、農家の人達が届けてくれた季節のスイカなどの果物や、野菜などが絶えなかった。

父を含めた当時の医者達は皆、好むと好まざるとに拘わらず「赤ひげ先生」であった。

軍医として戦死したりせず、空襲で死なずに生き残っただけで有難いと思う時代だった。

父も原爆で多くの家族・親族を失っている。父自身は、原爆で生き残った一人である。

父の実家は、爆心地・原爆ドームのすぐ近く、広島平和記念公園東側の、高欄を彫刻家、イサム・ノグチがデザインした事で有名な、平和大橋に隣接していた。

戦争さえ無ければ、父も、広島日赤内科で勤務していただろう。

父の当時の数点の残された品から、そこに勤務していた事を、最近知る事ができた。

父の小冊子の裏表紙に「昭和15年2月24日、広島日赤内科、栗所有」とある(図9)。

父は死ぬまで働いた。今、この文章を書きながら、私もそうしようと思うようになった(もちろん、できればの話であるが)。

父が66歳でガンで死亡した時、母は「きっと、あの原爆のせいだ、戦争さえ無ければ、原爆さえ無ければ……」と泣きながら言った。その母も、66歳でガンで死んだ。

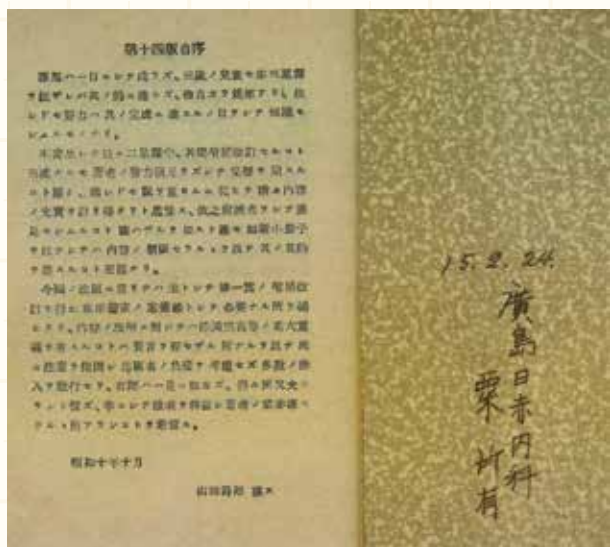


図9 原爆で父の戦前の品は少ない「広島日赤内科」とある

私が小6の昭和36(1961)年、日本医師会・武見太郎会長の元、全国一斉休診が行われた。

この日の事は、ほぼ記憶がない。世間で騒ぐような事は無く、通常の日曜日のように、淡々と過ぎたように思える(私が、学校に行っていたから分からなかったのかもしれない)。

当時は医師数も現代ほど多くなく、大部分が住民と密着した町医者であり、皆、同じような立場から、何の問題もなく、医師全員が休診したし、患者も納得し、気にも止めなかつ

ただろう。

都会の事は知らないが、「患者の為の医師が、休診するなど、けしからん」と叫ぶ医師など、皆無であったろう。

休診していても、もし本当に問題のある患者が来院すれば、通常通り診療したであろう事は、当時の医師としては当たり前の事であったろうし、それを、とやかく言う医師会でも無かったはずである。

おわりに

昭和20年代～34年に、大分県日出町の小さい町医者であった父、そして父を助けていた母と共に育った私は、真冬の冷たい夜、雨の日の夜中の往診(現在と異なり、石ころを敷き詰めた国道、田舎の細いドロ道を、後ろに取っ手の付いた四角い懐中電燈を頼りに歩いて、あるいは自転車で、あるいは、兎マークのスクーターのピジョンでの往診)はもとより、母の集金など、当時の医者之苦労話を書くきっかけを与えてくれた、木之下先生に感謝すると共に、自分への戒めとして、令和7年の年頭にあたり、古いが然し、鮮明な記憶を辿りながら本文を書いた。

執筆期間が数日しかなく、推敲する事ができなかったが、記憶にある1/10ぐらいは、記載できたと思う。

最後になりましたが、市医師会員、事務局他、この文章を読んで下さった皆様、及びその御家族の皆様方に、感謝を込めて、

「新年 明けましておめでとうございます。本年が皆様方にとって一層の佳き年でありますよう祈念いたします。

・ときはなる 松のみどりの春くれば
今ひとしほの色まさりけり(古今)」
令和7年元旦 宗博

(つづく)